ちょっとそこまで ～お散歩日和（地域編）～

田柄不動尊

せっかくこれまで愛染院について触れてきたので、もう少しお付き合いください。今回は、その境外施設である「田柄不動尊」です。

ここに祀られているのは、その名の通り、不動明王です。

そして、その両脇侍には、矜羯羅童子（こんがらどうじ：向かって右）と制吒迦童子（せいたかどうじ：向かって左）を従えた、不動三尊像となっています。矜羯羅童子は童顔で、一心に合掌している姿に表され、制吒迦童子は対照的に、金剛棒を手にした悪戯小僧のように表現されています。その位置が通常よく見る三尊像の逆になっている点が面白いと思います。

その不動明王ですが、サンスクリット語で「アチヤラナータ」と言い、「動かざる守護者」を意味することから、「不動」の漢字が当てられました。

燃えさかる火焔光背を背負っていますが、これについては、少し解説が必要です。

仏教では四相と言って、「生・住・異・滅」の４つの段階を経て世界は消滅するとも説かれています。そのとき世界を焼き尽くす火を「劫火（ごうか）」と呼び、不動明王が背負う炎こそ、その劫火だと言われています。つまり、不動明王から生じる火が一切の煩悩を焼き尽くすことを象徴しています。

また、右手に宝剣を、左手には羂索（けんさく：５色の意図を撚り合わせた救済仏具）を握りしめ、恐ろしい顔（憤怒相）で睨みをきかせています。これは、さまざまな欲望に惑わされる人々の迷いを剣で断ち切り、欲の海に溺れる人々をロープで引き上げてくれる頼りになる仏であるとの意味です。また、怖い顔も、親が子を叱るのと同じで、人々に対する愛情がその内側に秘められていることを表しています。

少し見づらいのですが、髪型が少し特殊で、「弁髪（おさげ髪）」を結っています。頭髪を束ねて左側に“おさげ”のように垂らしているスタイルには意味があります。

まず、頭上には蓮華（頂蓮）を載せていることから、頭の上は「仏界」を、左側に垂らした髪の先は、私達の「衆生界」を表しています。このことから、常に不動明王は人々の救済のために注意を向けていることを意味しています。

また、髪を束ねているのは、一刻も早く救済活動のための行動が起こせるよう、髪が邪魔にならないことを表しています。

これらは不動明王独特のもので、逆にこれが目印になるとも言えるでしょう。約束事に縛られた他の仏像と違い、不動明王は架空のキャラクターですので、仏師の遊び心満載で、そこもまた魅力

なのです。不動明王巡りをすると、その個性に改めて気付かれるはずです。

ついでに触れておくと、不動明王信仰が人々の間に広がったきっかけは、元寇だと言われています。国家最大の危機に際し、さまざまな加持祈祷が行なわれましたが、とくに効果があったのが不動明王の修法で、みごとに元を退散させることができたというのです。

また、「平家物語」での、頼朝に挙兵を促した文覚上人の那智の修行の下りなどは、人々に霊験あらたかな思いを募らせるのに十分だったはずです。

本尊の不動明王の話に偏ってしまいました。

もともとこの不動堂は、田柄地域の村役人であった相原家の墓地であり、阿弥陀仏を祀るお堂でした。恐らく相続税対策なのでしょう、愛染院に管理が移って現在に至っています。したがって、前ページの本堂内の写真をよく見ると、不動明王の向かって左側には阿弥陀仏が鎮座しています。

裏手は今でも墓地が残っており、その中に、一族の長である「相原源左衛門」の銘が刻まれた墓碑もあります。

彼については、練馬区教育委員会が発行する「練馬区を開いた人々」に掲載されていますが、簡単に言うと、明治２年、上練馬村の窮状を救うために助郷負担の軽減嘆願書が提出されたとの文書が残っているという内容です。その中には、当時の農民の窮状が切々と綴られており、村民のためを思っての行動であることが如実にうかがえます。しかし、村役人にとっては極めて不都合な行動をあえて実行したことになりますので、彼の人柄が大いに偲ばれる内容と言えるでしょう。

前にも触れたことがありますが、「南部の赤門」と呼ばれている相原家薬医門の残っている、あの屋敷の当主です。ただ、代々が「源左衛門」を名乗っているので、何代目なのかで区別しなくてはいけません。厄介です。

最後に、裏手の墓地に行く通路脇に２体の石仏がありますので、触れておきます。向かって左が、舟型の如意輪観音像です、延宝２年（１６７４年）８月の年紀が薄く見えますが、不思議なことにその脇にもう１つ、宝暦（１７５１～１７６４年）の年号も見えます。どういうことなのでしょうか。こういう謎めいた記述に出会うと想像力を掻き立てられます。

向かって右は庚申塚です。正面に「青面金剛尊」の文字が彫られ、造立年は安永９年（１７８０年）２月となっています。足元には三猿が彫られているとは言え、残念ながら青面金剛像が彫られているわけではないので少々魅力には乏しい気がします。

この庚申塚については、練馬区教育委員会発行の「祖先の足跡　練馬の庚申塔」という古い著作物で、調べてみたところ、もともとこの地にあったのではなく、田柄３－１３との表記を見付けました。恐らく、この墓地のすぐ北隣にあるマンションを建設するに当たって、移設したものと思われます。無下に廃棄されずにこうして生き残っていることをとても愛おしく思います。

（終）